

国際光年シンポジウム

天の光・地の灯 ～全国巡回星景写真展～

池田晶子（天の光・地の灯実行委員会）

1. はじめに

9人の星景写真家が集まった《天の光・地の灯》実行委員会では、2015年9月より、能登にある柳田星の観察館を皮切りに全国巡回展を実施しています。2016年2月現在、8番目の会場、釧路こども遊学館で展示中です。

星空を愛する者にとって暗い空は必須ですが、光害をもたらす地の灯もまた、人類の営みの現れであることと受け止め、「天の光」と「地の灯」をコラボさせる星景写真を展示しています。

国際光年にあたり、星空を愛する多くの人々や、はじめて星空の美しさに接する人々に星景写真を鑑賞していただき、世界はまだ美しい、そしてその美しい世界を子どもに残して行きたいと考えます。

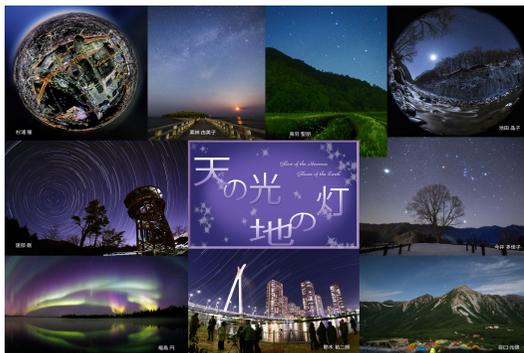


図 1

2. 開催趣旨(企画書より)

日本の天地開闢(かいびやく)神話では混沌が陰と陽に分かれて天地がなつたとされる。旧約聖書の天地創造でも、神ははじめに光を作られ、光と闇をわけ、昼と夜としたとあり、世界中どこの神話でもたいてい生まれる前の混沌たる世界から、神が天と地、闇と光、夜

と昼を分けたというくだりが見られる。古代の人々が光をもって世界が成つたと信じてきたように、宇宙ステーションから地球を見て灯の集中しているところが都会、文明の中心と考える現代人もまた、光によって世界を定義しているとみえる。まさに「はじめに光ありき」だ。

星空を限りなく愛する者としては、地上の灯は邪魔なものに違いない。しかし、その灯なくして、文明は成立せず、文明のないところで夜空を楽しむだけの余裕は生まれまいだろう。一方、必要以上の灯とエネルギーを使っていることで、せつかく文明によってできた余裕を空の鑑賞に充てられないという悩みもある。文明に不可欠な光と星空の美しさのバランスは、人類文明と自然の均衡への手がかりにも似て、現代人類に突きつけられた大きな課題と言えなくはないだろうか。

あたかも、国連が国際光年を宣言した2015年、闇があつてこそその光の美しさを実感してほしいと願い、暗い空に輝く星々、人の営みと夜空の美を追究してきた星景写真家たちが、その活動を世に問おうと写真展を開催したいと集まった。

日本各地のギャラリー、科学館を会場として、星空を愛する多くの人々や、はじめて星空の美しさに接する人々に鑑賞していただき、世界はまだ美しい、そしてその美しい世界を子どもたちに残して行きたいとの思いを伝えたいと願う。

3. 開催にこぎ着けるまで

3.1 メンバー集め

かねてより星景写真展を小さなグループで

やりたいね、と数人の仲間で話し合っていました。土台となる趣意書を書き上げることで、具体性が出ました。何を思い、何を訴えるのか、どんなメッセージを発信したいのかという展示会のコアとなるものがない写真展が昨今は多すぎます。ただきれいで幻想的な写真を集めることはそうむずかしくはありません。それだけでも十分に写真展として評価はされるでしょう。しかし、それだけなら個性あふれる9人が集まって展示会をする必要はありません。それぞれ力があるのだから個展をすればいい。あるいは、大きな団体の中で作品を発表していけばいい。

一本芯の通った展示をし、世にメッセージを発信したい。

かくして、全国から国際光年を意識したテーマに賛同した9人が集まり、相談はネット中心に、活動を開始しました。9人は星屋が大半とはいえ、風景写真から入って、星景に興味を持って取り組んでいるメンバーもあり、Photoshopを自在にこなす者あり、簡単な現像のみの者あり、あるいは山を登って星を撮る者あり、車から5分以内のところではしか撮らない者あり、大自然中心の者、都市星景の名手など、得意分野が違って、これなら、宇宙に通じる暗い空と人類文明の放つ灯のバランスを表現するにふさわしいメンバーだろうと思われました。

3.2 作品選定

作品の選定はかなり「過酷」なものでした。9人がそれぞれ10点ほど候補作を上げ、Facebookのグループを作成し、コメント機能を使って他のメンバーの作品に注文をつけます。構図が悪いの、仕上げが甘い、地上の描写が今ひとつだの、星座が切れていてしからんだの、相当言いたい放題でした。各自注文を受けて3、4回は作品を修正しています。結局修正前に戻った作品もあれば修正してよくなったものもあります。

展覧会によっては、ある一定の地位を得た作者は自由に好きな作品を出せるところもありますが、それでは展覧会のレベルは落ちていくことが予想されます。わたしたちのやり方は一見不自由なようで、結局はメンバーどうしで切磋琢磨ができ、展覧会のレベルを大きく上げることになりました。メンバーの信頼関係の上に成り立っている方式ではありません。

最後に、候補作品を人気投票にかけ、人順に展示作品を選び、地上のモチーフ、星座、撮影方法、色合いなど作品のバランスを考慮して最終作品を決めました。



図 2

3.3 展示会場探し

大きな団体と違い、メンバー9人だけの小さな集団では会場選びが大変となります。果たして受け入れてくれる会場を見つけることができるのか。この点、当グループはFSPACEという旧ニフティーのフォーラム出身者が数名おり、その伝手で、各地の科学館に声をかけてもらいました。特に、元FSPACEシスオペで、現アルタイル代表の加藤治さんがプラネ関係者に積極的に宣伝して下さったことが大きく、メンバーの心配をよそに、すんなりと最初の半年分の展示は切れ目なく決まりました。科学館以外にイベント会場での展示や、地方の展示会場などがあります。コンサートとのコラボもありました。

し、和室での展示にも挑戦しました。

3.4 パネル仕上げ

9人のメンバーはSNSや雑誌で作品を発表しており、それなりに知られている作家ばかりでしたが、写真展となると経験があまりなく、プリントして額装することに関して知識や経験が乏しく、初めのうちはかなり迷走しました。そんな中、あれこれ情報を集め、勉強をして最適のプリント、パネル仕上げができた、と思ったのもつかの間、額装業者が大問題を引き起こしてくれました。これについては今日なお問題を引きずっており、いずれ解決してみなさまにもことの経過を発表できる 때가来ると願っています。

3.5 広報やIYL後援申請

広報は主としてFacebook、Twitter、mixiなどのSNSを使い、ホームページも立ち上げました。ロゴの作成やポスター原案の作成、案内はがきなどすべて素材を自作しました。各地のメディア、天文関係雑誌、ブログ、メールニュースなどにも配信しました。とくに、星ナビが9月号からコラムにて巡回展を取り上げてくれ、11月号には1ページの特集を組んでくれたのはうれしいできごとでした。IYLには会場毎に後援申請をしました。初めのうちは英語ページにも申請したのですが、何を勘違いしたのか、ビザサポートのために招待状を送ってくれといった要請が来て、以後英語ページには申請しなくなりました。

3.6 展示会の設営、運営

会場によって設営運営撤去を丸投げしているところと、すべてメンバーでやらなければならないところがありました。ただ、作品の展示順は一貫してコンセプトに従い、光害の感じられない暗い空から少しずつ光害が作品に入ってきて、最後は大都会の光を作品化したものという展示順を指定しました。設営す

る人間は展示会の趣旨を理解し、「宇宙からの光」を感じ取り、それを薄めてしまう「地上からの光」も受け止めようというメッセージが伝わるように展示を工夫しました。



図 3

4. 地方作家の招待

《天の光・地の灯》全国巡回星景写真展の他にない特徴の一つは、地方作家の招待です。現在のところ、福井、宗像、岐阜の3会場で地元の作家を招待して展示に参加していただいています。実質的に、地元の作家が会場を探し、申込みをし、地元メディアに後援を依頼して、そこにわたしたち9人も参加させていただくという形です。

福井では地元で名の知れた作家2人、宗像では実力派が4人、岐阜では若手を含む2人と会場規模や参加希望に応じて変わってきます。もともとは全国巡回のメンバーに誘ったけれど、全国巡回はつらいので地元に来たときだけ参加したいという作家もいます。作品の選定においては9人の全国巡回メンバー同様、厳しく注文が付き、何度も現像のやり直しをお願いしたのですが、誰一人愚痴をこぼしたり怒り出したりすることなく、互いに切磋琢磨できたことで、9人の全国巡回メンバーも大いに刺激を受けました。地元作家の参加を得たことで、地元の風景を織り込んだ星景写真の展示が実現し、地元の観覧者に喜んでもらえるという大きなメリットが生まれま

した。会場設営や在廊管理、宣伝などとてもわたしたちでは手が回らないこともお願いできて巡回展がとても豊かになったと自負しています。一石二鳥にも三鳥にもなるとてもいいアイデアで、個展などを全国巡回するときもこの方法を使うといいと思いました。

5. 作品解説プレート

星景写真は綺麗で見るのは好きだけど何が写っているのかよくわからないという声をよく聞きます。また、星景写真という露出の難しい分野だけに撮影データも気になるところです。そこで、当巡回展では「作品解説プレート」なるものを考案しました。興味のある作品の解説プレートを手にとりいただき、作品と見比べつつ鑑賞するという趣向です。



図 4

図 4 のように星座線を入れ、撮影の意図やいきさつを解説し、撮影データ、英文解説まで入れています。これを 3 部作成し、プラスチックケースに入れ、各会場の一角に解説プレート置き場を設けて来場者が自由に手にとって会場のどこにでも持っていただけるようにしました。これはかなり評判がよく、星はわからないけど見るのが好きという方から星を見れば緯度を当てられるという人にまで喜んでいただけました。科学館では教材となり、星を入れた風景を撮っているという人には星を入れただけでは星景写真にならない、しつ

かり星空の構図も考えないとだめだというメッセージが伝わりました。解説プレートはこれからの星景写真展では標準となる予感があります。



図 5

6. 巡回したところと今後のスケジュール

[2015 年]

* 9 月 1 日 (火) ~ 30 日 (水)

石川県 柳田星の観察館「満天星」

* 10 月 10 日 (土)、11 日 (日)

山梨県甲斐市 ライトダウンやまなしプレイベント (ラザウォーク甲斐双葉 2 F ラザホール)

* 10 月 21 日 (水) ~ 25 日 (日)

福井市 ギャラリー和 (写真の伸光)

* 11 月 11 日 (水) ~ 16 日 (月)

横浜市 根岸なつかし公園 / 旧柳下邸 (和室スピンオフ展示)

* 11 月 13 日 (金) ~ 1 月 17 日 (日)

茨城県日立シビックセンター

* 12 月 25 日 (金)

横浜市 横浜みなとみらい小ホール (コンサート・写真展示・観望会)

[2016 年]

* 1 月 20 日 (水) ~ 31 日 (日)

名古屋セントラルギャラリー

* 2 月 6 日 (土) ~ 3 月 6 日 (日)

釧路市こども遊学館

* 3 月 18 日 (金) ~ 30 日 (水)

福岡県宗像ユリックス 市民ギャラリー

*5月2日(月)~8日(日)

岐阜市じゅうろくてつめいギャラリー

*今後：仙台、京都、千葉、三鷹、銀座、横浜を予定しています。

★巡回展会場情報提供歓迎

7. 巡回展概要

ホームページ：

<http://www.lummo.net/ex2015/index.html>

後援：スペースフォーラム (FSPACE)

協賛：2015 国際光年協賛

展示作品：星景写真

+全紙プリント 36 作品

+スライドショー 全 36 作品

開催母体：《天の光、地の灯》実行委員会

参加作家：池田晶子、今井多佳子、栗林由美子、杉浦隆、鈴木祐二郎、谷口元啓、鳥羽聖朋、福島円、渡部剛

+地元作家：全国巡回の9人のほか、地元の星景写真家も招いて作品展示

展示会場：日本全国ギャラリー、科学館

開催時期：2015年~2016年

作品貸出料：無料(謝礼が出るようなら辞退はしません)

作品輸送料：福岡の保管所との往復送料(開催地により異なるが、片道1万円前後)

ギャラリートーク、星景撮影教室：応相談
ポストカード販売

8. おわりに

星景写真展を開催したいと考えたときが国際光年でした。せっかくなら国際光年の行事として星景写真展を構成したいと考えたのがはじめに提示したコンセプトです。



図 6

わたしたち星好きはどうしても地上の光を敬遠しがちで、街灯が明るい、店のイルミネーションがうるさいのと考えてしまいます。写真を写す人間ならなおのこと、光害にはみんな泣かされています。一方、カメラ技術の向上に伴い、光害のあるところでも星を表現することが可能となりました。フィルム時代では考えられなかった比較明合成という手法を用いれば大都会の真ん中でも、星は輝いているのだとのメッセージを発することができます。

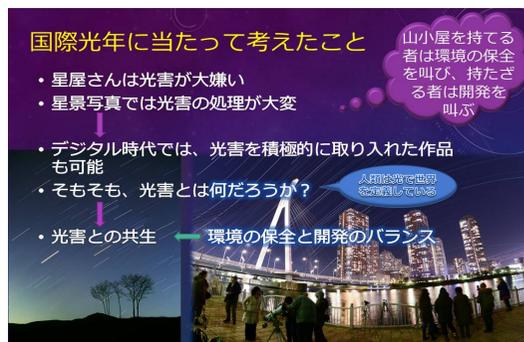


図 7

わたしたち人類は光で世界を定義しています。暗い空を見上げ、星を愛で、文明の中心、光を多く発する都会の中でも空を見上げて星を探しています。光なくして成り立たない文明の中でただ「光害」を叫ぶのではなく、光との共生を探っていきたいと考えます。過度のエネルギーや資源(光を含む)を使わない工夫は、人類に未来を担保し、いつか宇宙の果てで未知の文明に出会うまで、人類文明を長らせることにつながります。

星景写真展を通して、そんなメッセージを多くの人たちに伝えることができればと願います。

池田晶子